[五章　塩の大地](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\OEBPS\text00028.html#toc-006)

　夜が明けた。

　襲来にあった聖地は、平穏を取り戻しつつあった。魔物の は滞りなく終わり、聖地にいる神官の多くは魔物の死体を片づけることに時間を費やしていた。目下の課題は、外にある巨大な死骸の片づけだ。これほどの魔物を倒すとはさすがは大司教と称賛しながらも、下手すれば聖地よりも巨大な死骸をどうするべきかと苦慮していた。

　さらに問題なのは、聖地を う霧だ。いま聖地に をかけているのは、朝霧ではない。いまだ外に居座る不死の怪物、南の『 』の結界が、聖地の結界の効果を大きく減じさせてしまっている。こればかりは霧自体が収まるのを待つしかないが、終わりが見えない。

　白く広がる霧の中、おろおろと聖地をさまよっている の神官がいた。

　フーズヤードである。

　大聖堂の駅舎にこもるのが常な彼女がなにをしているのかといえば、モモを探しているのだ。

　昨日までさかのぼるが、同じく外に迎撃に行ったエルカミにモモの現状を聞いたら『シャワーを浴びてくるそうだ』とか、訳のわからない理由を告げられた。

　モモと教典の同調作業を行っていなかったために、通信魔導での連絡ができない。そうすると、フーズヤードが大聖堂の外で待っていなければモモは戻ることができない。

　だから彼女は着物の少女を大聖堂へと転移させてからも、自身は外で待機していた。

　そして、一夜があけてしまった。

　日が沈んだ時点で明らかにシャワーの問題ではないことはわかっていたのだが、そのうちに戻ってくるだろうとずるずる引き伸ばし、結果として半日近く 不明のままだ。

　いくらなんでもこれは、とフーズヤードは寝不足の体に鞭を打ってモモの所在を探し始めた。

　魔物との戦闘でなにかあったのか。それとも単純にさぼっているだけなのか。モモの性格からして後者の可能性が高そうだが、確かめてもいないことを断定するのは危険だ。

　今回の騒動では巡礼者のみならず神官の中にも若干名、死傷者や行方不明者が出ている。もしかしたらモモも被害者の一人になってしまっているのではという可能性に思考が至って、半泣きで聖地をうろついていた時だ。

「フーズヤードさん！」

　モモの声が聞こえた。

　基本は白服の神官服とはいえ、改造したふりふりのスカートとハートの連なった尻尾マークのある黒タイツはよくよく目立つ。探していた本人が現れたことに、無断の遅刻を めることも忘れて喜びの声を上げる。

「モモちゃんさん！」

「はーい。モモですぅ」

　フーズヤードが知るよりも返答の声が一オクターブ高かった。

　いつもより耳に響く高音に、駆け寄ったフーズヤードの眼鏡がずるりと鼻からずり落ちる。

「ど、どうしたの、やたらと元気がいいけど、なにかあった？」

「え？」

　モモがきょとんと目を丸くする。なにを指摘されたのかわからないといわんばかりの顔だ。

「なんのことですかぁ？　モモはいつもこんな感じですぅ！」

「そ、そうかな？　いや、確かにそう言われればそうな気もするけど……そうかなぁ？」

「もっちろんですー。なにがおかしいんですかぁ？」

　フーズヤードは、いつも通りだと主張するモモをまじまじと見る。

　本気で自覚がなさそうな態度をとっているが、やはり変だ。具体的には、いつもより口調がきゃぴきゃぴしているし、仕草も必要以上にかわいこぶっている雰囲気がある。初対面の時から垂れ流しになっていた さと不 な態度が見当たらない。いまのモモは、まるで大好きな先輩に好かれたくてしかたがない後輩の態度をとっている。

　あまりの変わり身に、心配するよりも不気味さが先立った。

「なにも……おかしくないよね？」

「もっちろんですぅ！」

　返答はとびきり愛らしいモモの笑顔だった。ドストレートの笑みは、絶賛寝不足のフーズヤードの不信感を貫通してずきゅんとハートに突き刺さった。

　 っこくて で、かわいらしくフランクな雰囲気。フーズヤードが思い描いていた理想の後輩に近いのがいまのモモだ。

「だね！　これが普通だよね！」

　反抗的なモモより、こっちのモモのほうがいい。ふって湧いた理想の後輩の登場に、フーズヤードは短期間でのモモの変化を歓迎した。

「大聖堂に戻ろっかぁ！　後処理の仕事が多いみたいだから、やることはいっぱいあるよ！　一緒にがんばろー！」

「はぁーい、モモにお任せですー！」

　ここ最近で一番の笑顔になったフーズヤードは、モモと連れ立って大聖堂に入った。

「それじゃ、しつれいしまーす」

　避難していた修道女や巡礼者の介抱など、もろもろの雑務を手伝い、伝令を請け負ったモモは大聖堂にある駅舎を出る。

　フーズヤードに任された書類を持って数歩、周囲に もいないことを確認して力を抜いた。

　モモの周囲の空間が む。髪の色から服装、身長すら変化して現れたのはメノウの姿だ。

「とりあえずは、成功ね」

　メノウはふわりとポニーテールを揺らして歩き出す。

　モモに化けて、フーズヤードに付いていくことで大聖堂に入ることに成功したのだ。

　例によってモモとは別行動だ。信頼する後輩にはすでに別の仕事を頼んでいる。

　大聖堂への再侵入に関しては基本的にうまくいったのだが、 に落ちないことがある。

「なんで最初の時に疑われたのかしら……」

　モモに化けての一言目からフーズヤードに違和感を指摘された時は、まさか初手から失敗かと心臓が凍り付いたものだ。

　メノウはモモの直属の上官である。そうでなくとも同じ修道院育ち。メノウは完全にモモの言動を把握していると自負している。先ほどまでの演技も、仕草から声色までこれまでにない精度で化けられていたはずだ。

　その割にはテンションが高いだの一人称が変だのと怪しまれた。

　そんなことはない。完全無欠にいつも通りのモモだったはずだ。メノウがよく知る後輩の愛らしさまで に演技しきった自信があった。

「私の油断……いや、さすが大聖堂入りした神官ってことかしら」

　さすがにモモの先輩としての期間と厚みでは負けていないはず。見くびって油断したつもりはなかったが、フーズヤードの眼鏡は伊達ではないらしい。非常に鋭いと感心しながら、カガルマのいる部屋を目指す。

　まっすぐ伸びた身廊の入り口近くから、脇にある南塔の階段を登る。

　 に来訪する【 】のために用意された部屋。前日までメノウも滞在していた場所だ。迷いのない足取りで向かう。大聖堂の内部に人が少ないことはわかっているため、障害なくたどり着いた。

　ノックもなしに、遠慮なく扉を開けて入室する。

「あら、メノウさん」

　突然の訪問にも、中にいる面々はまったく驚いた様子がない。立ち上がってメノウを迎え入れたのは着物姿の少女、マノンだ。メノウが逃亡したのと入れ替わりで侵入し、カガルマの付き添いになった彼女は扉を開けたメノウのもとに近づき、雅な仕草で両手を合わせて歓迎の意を表した。

「ようこそ、いらっしゃってくださって しいです！　『盟主』さまと二人きりという状況が、もう息がつまって仕方がなくて！　用事も済みましたし、早々に帰ろうと思って列車を用意してもらっていたんです」

「そうなの。都合がいいわ」

「はい？」

　メノウが大聖堂まで戻ってきた目的の一つに、魔導列車があった。

　聖地という魔導結界を消すにあたって、どうしても必要になる要素だった。ともすればフーズヤードを脅す算段もつけていたが、使用資格がある人間の協力が取り付けられるならそれに越したことはない。

「ねえ、マノン。あなたと取引がしたいの。話、いいかしら」

「取引、ですか」

　マノンの笑みの質が変わる。

　つつと一歩、後ろに下がる。護身用具の鉄扇を取り出して、口元を隠す。

「さて、わたくしがメノウさんに差し出せるものがありますでしょうか」

「ええ、あるわ」

　マノンが頼めば『盟主』は断らない。それは大きな魅力だ。

「では逆に、メノウさんがわたくしに差し出すものはなんですか？」

「大聖堂の内陣の奥にあるもの」

　ぴくりとマノンの が動いた。

　さんざんマノンが言及し続けていたものだ。彼女が知らないはずがないとは思っていたが、案の定である。

「あなたは、最初からそれを探しに聖地に来たんでしょう？」

「……ええ。否定する意味もありませんね。メノウさんの予想通りです」

　やはりマノンは自分の目的に沿うものに見当をつけている。さすがに現状では手出しができないと判断して、聖地を去ろうとしていたのだ。

　聖地の中心部。つまり、いまメノウたちがいる大聖堂に覆われた、強固に守られている場所。大陸各地への転移の要である『龍門』よりも、さらに厳格に管理され、物理的、魔導的な出入り口すら存在しない閉ざされた内陣区画。

「記憶の 装置であり保管庫にして補給装置。聖地が守っているものの正体が、古代遺物『星の記憶』です」

　マノンは、それを求めてきた。メノウは名称までは知らなかったが、異世界人の記憶を供給するものがあることは、ほかならぬマノンから聞いていた。

　記憶の欠落がないマノンがそこを求めている理由は、おそらく『 』のためだ。彼女の力をさらに広げようというのか、もしくは──もっと、情動的な理由なのかもしれない。

「けれども、『星の記憶』を取引に使おうとは、おかしなことですね。メノウさんが自由にできるものではありませんよ？」

「そうね。でもね、マノン」

『星の記憶』は完全に された場所だ。フーズヤードが住まいとしている駅舎のさらに奥。大聖堂の内陣の奥に存在している。大司教が秘匿に全力を尽くしているようなものだ。メノウには手も触れられないというマノンの疑惑を肯定する。

　だが。

「大聖堂ごと、結界都市である聖地を消し飛ばせる方法があるとしたら、どう？」

「……それは、それは」

　マノンの目が、きらりと光った。

　聖地の消失。それはマノンが の小指と協力しても不可能だと判断したことだ。大陸屈指の地脈から膨大な導力を供給されている結界都市を崩す方法は思いつかず、かろうじて霧の結界を流入させることで魔物の侵入という点で効果を無効化しただけにとどまった。

　入り口で立ち話をしていたマノンが、鉄扇で室内にあるソファーを示す。

「どうぞ、メノウさん。長いお話になるかと思いますので、お座りになってお話を続けてください」

　聖地直通の魔導列車の運行を管理するのは、フーズヤードの仕事の一つである。

　プラットホームにつながる『龍門』と導力路の調整については、やれることは ない。千年前の古代文明の であり、フーズヤードも胸をときめかせてやまない地脈という名の導力路を潜航する導力列車システムは手の出しようもなく完成されている。

　どちらもが目的地さえ定めれば、ほとんど自律稼働する高度な魔導具だ。余計な手を出さないのが一番なのだが、万が一にも問題がないように卓越した儀式魔導者の監督が望ましいということで立ち会っていた。

「今回は世話になったね、フーズヤード君」

「いえいえ、お気になさらず。もうそろそろ発車しますから、どうぞ」

　今回もまた、やることもなく帰路に就くというカガルマを見送った。一緒に来たマノンという少女に関しても、先に列車に乗っていることは確認している。

　列車が出発する。導力光を噴き上げて起動した列車はレールを進み、直径十メートルほどの『龍門』に吸い込まれるようにして消えて行った。

　一仕事、終了である。フーズヤードが、ぐうっと伸びをした時だった。

　激震が、フーズヤードを襲った。

「うわぁおぅ!? 」

　地面が、激しく振動した。バランスを崩したフーズヤードは きそうになって、慌てて踏ん張る。

　地震か。とっさにそう思って、勘違いに気がつく。即座に異常を察知できたのは、彼女が龍脈の在り方に敏感だったからだ。

　地脈が、荒れている。それも、いままでになく。

「う、噓……!? 　まさか、さっきの導力列車が!? 」

　思った以上の深刻な事態を前にして、フーズヤードは青ざめた。

「導力列車が地脈の中で爆発した!? 」

　フーズヤードからその報告を受けた時、大司教であるエルカミはそう叫んだきりしばし絶句した。

　聖地につながる地脈は、大陸各地に行き渡る流れの根幹ともいえる大動脈である。流れる導力の強さは、おいそれと人の手に負えるものではない。高位の神官が十人揃おうと、おこぼれのようにわずかな力を引き出せるだけだろう。

　それが、噴火でもするかのように【力】をまき散らしている。

　異常事態の原因を聞いたエルカミは自失状態から、わなわなと全身を震わせてすさまじい怒声を張り上げる。

「このバカ者が！　なにがどうして、そんなことが起こった！」

「そ、それが……」

　エルカミの罵声を受けたフーズヤードは、紫色になった唇を必死にこじ開けて、説明する。

　カガルマが帰路に就くために申請した、地脈を潜航する魔導列車。それが暴走した。外部からの干渉は難しい地脈だが、内側から暴発させられてはひとたまりもない。考え得る限り、地脈に直接ダメージを与えるもっとも効率的な手段だ。

「し、失敗は、していないんです。なのにぃ──」

「バカ者が！　言い訳などいらんッ。このままだと、どうなる」

「ひぅっ！　た、たぶんですが、『竜害』が起こります。聖地の維持にも、少なからぬ影響が、でる、かと……」

　報告をしながら、そろりとエルカミの顔を確認する。フーズヤードは自分の上司の顔色を見て、後悔した。

　エルカミの顔が怒りで っ になっていた。

　怒髪天を突かんばかりとは、まさしくいまのエルカミのためにある言葉だ。貴重な魔導列車の喪失。聖地の維持すら危うくする、地脈の暴走。『竜害』に発展しつつある現状。どれか一つでも、激怒するには余りある。

　放置はできない。聖地の維持には、少なからず地脈の大動脈の恩恵を受けている。その流れを途絶えさせてしまえば、聖地そのものが揺らぐ。修復に向かわなければならなかった。表情は怒りで険しくなっていたが、事態を挽回する手立てを探っていた。

「……地脈の修復に向かうぞ。急務だ」

「ど、どれだけの人員を付けていただけるのでしょうか……？」

「聖地にいる人間は神官、巡礼者問わずに避難させる。 『 』が統括する修道院墓地へ、一時的にだ」

「へ!? 」

　フーズヤードが素っ頓狂な声を上げる。だがエルカミは本気だった。通信魔導で主要な神官へと連絡を送る。

「『 』には……連絡がつかんな。こんな時に、奴はどこに……！」

　聖地が消える。それはもう、止めようもない。結界都市である聖地を維持するには、常に莫大な導力を必要とする。主要の地脈をひとつ分断されては、消失するのは時間の問題だった。

　ならば、その後に残るものを人目にさらすわけにはいかなかった。

　いまエルカミとフーズヤードが立っている駅と転移の要である『龍門』しかり。ここより奥の内陣の奥にある、もう一つの施設『星の記憶』しかりだ。まずないとは思うが──さらにその奥にあるものまで出てきた日には、取り返しがつかない事態になる。

『主』の帰還を前にして、こんな事態が起きるとはと歯嚙みをする。

　出来るだけ速やかに、避難の名目で聖地の見えない場所まで退去させる必要がある。

「で、では地脈の対処は……先ほども言いましたが、下手をすれば『竜害』になるので──」

「私と、お前でやる他あるまい」

「二人だけで!? 」

「くどいッ。なにをぼやぼやしているか！　早く対策を立てろっ。龍脈に関する時だけは役に立てるだろうが、愚図が！」

「はいぃ……」

　無理難題にフーズヤードは、だーっと の涙を流しながら、まずは地脈の状態を知るために外へ向かう。

　この時点で二人とも、失念していることがあった。

　教典の通信。そこから生じる指示系統からは避難指示が届かない人間が一人いることを。

　聖地の施設群が薄まり、にわかに騒ぎが広がっていく中、トキトウ・アカリは大聖堂に取り残された。

「こんなこと考えるとかメノウって、あたおかだわ」

「なんですか、あたおかって」

「頭くるくるおかしなやつの略」

　聖地から離れた田園地帯。間欠泉のように地面から激しく導力光が噴きあがっているのを眺めながら二人の少女が切迫した状況にあるまじきのんきな会話をしていた。

　メノウが考案した地脈の暴走のさせ方は、至極シンプルなものだった。モモが地脈に干渉して、小規模な導力の間欠泉をつくり出す。かつてグリザリカで戦った時に地脈を じ曲げた魔導を行使したのだ。

　これだけでは大した現象にならない。今回モモが干渉した地脈は、かつてのものとは規模が違う。モモの膨大な導力をもってしても、わずかに流れを歪めるのが限界だった。

　だがモモが歪めた流れに、導力体となって地脈の流れに乗る魔導列車を通せばどうなるか。

　その結果が、御覧の通りである。線路を捻じ曲げられた列車と同じだ。地脈という線路から脱線した導力列車は周囲を巻き込んで完全に暴走し、地面から飛び出し破裂した。貴重で替えの利かない古代遺物の は、大穴が開いた地面に散らばっている。

「あれ、『盟主』が乗ってたんでしょ。死んだんじゃない？」

「死んでるといいですね。大聖堂に来てからずっと先輩と同室だったんですよ、あのおっさん」

「は？　なにそれ。死刑確定じゃない」

「ですよね」

「それよりマノンは乗ってなかったわよね。あの子が巻き込まれていたら、『 』の反応が怖いのよ」

「どーでもいいじゃないですか。犯罪者なんですから、死んだほうが世界のためですよ」

「ていうか、モモ」

「なんですか」

「これ、『竜』にならない？」

「……」

　モモは無言で空を見上げる。

　地面に開いた大穴より、轟々と吹き出す風に大気が巻き込まれて渦巻いている。導力の波動に大地が み、大気は逆巻き、世界が悲鳴を上げている。周囲に無作為にまき散らされていた導力の脈が、徐々に力強くまとまってきた。

　穴を穿たれた地脈から大きく大きく吹きあがる導力光が、天とつながった。

　天脈と地脈──その二つを合わせて『龍脈』と呼ばれている。魔導行使者の制御なく、この二つがつながった時にどうなるか。

　どくん、と世界が波打つ。無論、錯覚だ。世界のすべてが波打ったと勘違いするほどの導力の波動がまき散らされたのである。

　無秩序だった導力の暴走に、指針ができてしまった。膨大な導力の収れんにより、天候が変化する。雲を巻き込み、土と砂を巻き上げ、本来ならば生命になりようもない無機物が天と地でつながった導力にまとわりつき、目に見える形をつくっていく。

　あまりに大量の導力が吹きすさぶせいで、世界がそこに意志ある命が生まれたと錯覚しているのだ。

　擬似生命現象は、徐々に徐々に広がっていき、エルカミが両断した巨大な魔物の死骸をも取りこんで糧にする。それでも一向に足りないと言わんばかりに、大地を削り取って巻き上げる。

　導力が荒れくるい、周辺物質すべてを呑み込み続けて巨大化し続ける現象を、この世界では『竜害』と呼ぶ。

　人知を超えた強烈な自然現象に、モモは目を細める。

「竜になりますね、これ」

「じゃ、私は今度こそ帰るから」

　 とならぶ世界最大級の災害を前にして、サハラは全力で逃げ出した。

　湧き出る霧の中心地。

　西の果てにある聖地と、南の果てにある『 』。本来ならばつながりようもないはずの場所をつなげているのは、 な少女だ。エルカミとの戦闘後に封殺されたままの彼女の には、マノンがいた。カガルマと一緒に列車に乗ったのちに、彼女に召喚してもらうことで事故に巻き込まれることなく傍に参じたのだ。

　マノンは を空中に縫い付けている釘を一つ一つ破壊しながら、蔓延していた霧すらも吹き飛ばす現象に目を向ける。

　どこまでも貪欲に地脈をむさぼり生命に成ろうとする『竜』。

「さて、メノウさんは約束を守ってくださいましたね」

　満足げに『竜害』の始まりを見つめるマノンをよそに、不満げな顔をしている子供がいた。

「まあ……」

　時として一国を呑み込んで膨れることもある巨大な現象を見て、 は珍しく悲哀を浮かべていた。

「あれが『竜』？　【龍】の名残にしたって、あんなに小さくなっちゃったのね。残念にもほどがあるわ」

「小さく、ですか」

「うん、とっても、とーっても。比べ物にならないくらい、小さいわ」

　マノンは改めて遠くに見える『竜』を見る。天から地につながり、周旋して物質を巻き込んでいる。巨大な竜巻はやがて全容もつかめないハリケーンになって、なにもかもを呑み込むだろう。

「あれで、小さいんですか？」

「小さいわ」

　天候を歪めるほどの現象を、小さいと評する。マノンに抱えられた は足をぶらつかせて、ちょこりんと唇を らせる。

「最大の純粋概念だった【龍】の成れの果てだなんて、ちっとも思えない。まったくもって小さいわ」

「それはそれは……本家本元の【龍】は、どれほどの大きさがあったのですか？」

「そうねえ。最大にして、最速最高の純粋概念だったあの人はね──」

　ほっそりとした手を持ち上げ、ぴっと小指で空を指さす。

「──あれくらい、大きくなれたわ」

　昼間に浮く白い月を示して、四大 の一人は自慢げに言い切った。

　聖地が、薄くなっていく。

　魔導でできた結界都市に供給され続けている導力を、生まれたばかりの『竜』が食い尽くす。自らが成るために、周囲にあるものをあるだけむさぼり膨れ上がる。生まれたがっている。

　地脈と天脈の流れのくびきから解放され、自由になろうともがき始める。

　神官がことごとく避難する中で、メノウは聖地があった場所をゆっくりと歩いていた。

　結界都市が消失したいま、様々な物品が散乱していた。建材こそ結界で構築されていたが、家具や日用品は普通のものだった。建物がなくなると同時に、それらが雪崩を打って落下した。まるで乱雑なゴミ捨て場の様相だ。

　はっきりと意味ある形が残っているのは、どこにもつながっていない線路が続く駅。

　もう一つはその奥にある、円柱状の一軒家だった。

　記憶を蒐集して、保管し、供給する『星の記憶』の在り処。

　大聖堂をシンボルとして信仰を集め続けた聖地は、いま見える二つの施設を守るためだけに張られた結界だった。

　きっと特別な建物なのだろう。メノウは、ぽつんとそびえる家を見上げる。なぜこうまでして守ろうとしているのか、真相は知らない。一時的であれむき出しになった施設に対して、 の人間がなにを思うのか想像もできない。こんなものがと驚くかもしれないし、意外とすんなり受け入れるかもしれない。

　どちらにしてもメノウの目的は、二つの施設にはなかった。

　しばらく観察をしていたメノウは、駅のホームに上がる。メノウが大聖堂に来た時に降り立ったホームは、家具残骸が散らばる中で残っていた。そこに人影を見つけたのだ。

　きっと聖地が消えていくとき、慌てて逃げ出したのだろう。彼女が閉じ込められた北塔からもっとも近い場所にたどり着いたのは必然だ。

　アカリは所在なさげにむき出しになったプラットホームに立っていた。どこへもつながっていない線路だ。迷子になっているアカリに しい。

　歩いてくるメノウに気がついた。アカリの顔がこわばる。メノウは構わず微笑んだ。

「ちゃんと追いついて来たわよ、アカリ」

「メノウ、ちゃん」

　アカリが顔を上げた。気まずげな表情だ。きっとアカリは、メノウと違って気持ちの整理がついていない。この状態ならば、舌戦での有利は容易くとれる。メノウは表には出さず、内心で意地の悪い笑みを浮かべる。

「な、なんか全部が消えちゃったんだけど、これ、メノウちゃんの ？」

「ええ、そうよ。アカリに会うために、聖地を消しちゃいました」

　メノウは後ろで手を組んで、おとがいを持ち上げる。アカリと出会ったばかりの頃の演技にも似た茶目っ気を込めて言ってやる。

「どう？　嬉しい？」

「嬉しいわけないでしょ！」

　返事は、怒鳴り声だった。アカリが顔を赤くして、なんてことをしてくれたんだといきり立つ。目に涙すら浮かべて、怒りをむき出しにする。

「聖地って、大事なところなんでしょ！　こんなことまでやっちゃって、メノウちゃん、どうするつもりなの!? 」

　聖地の被害を憂いているわけではない。聖地を消すなんてことをしてしまったメノウの今後の人生をどうするんだと訴えていた。

　アカリの感情を受け取って、メノウは軽く肩をすくめた。

「さあ？　どうにかなるわよ」

　竜害は大司教とフーズヤードが止めてくれる。地脈が落ち着きを取り戻せば、聖地は再構成されるだろう。建築物消失の影響で散らばってしまった家具諸々はどうしようもないが、そこは目をつぶってもらうほかない。

　致命的なことは起こっていない。

　なにより、こうしてまたアカリと会えた。メノウは自分の目的を達成している。

「ね、アカリ」

　メノウは手を差し出す。

「私はね、自分の道の答えを見つけに来たの」

「こた、え……？」

「ええ。だってね、アカリ。いまから、すっごく情けないことを言うけど」

　一呼吸ためて、大げさな仕草で両手を広げる。

「いまの私は、自分がどうしたいのか、わからないの」

　アカリが目を丸くした。まさかメノウがそんなことを言うだなんて、露ほども考慮していなかったのだ。

「メノウちゃんは、えと……わたしを、殺しに来たんじゃなかったの？」

「最初はそのつもりだったわ」

　彼女の驚きを見ながら、メノウははっきりと告げる。最初はアカリを殺しに来たはずだった。

「でもね、いまの私、人を殺せないのよ。だからどうするべきかっていう道が見えていないの」

　アカリを殺しに来た途上で、メノウは に敗北した。 を殺しそこねた時に砕け散った自分の道、失った意義を、まだメノウは取り戻していない。

　アカリが困ったように首を傾げる。消えた聖地。ガラクタの積みあがる周囲を見渡して、またメノウに視線を戻す。

「こんなことをしたのに？」

「こんなことをしたのに」

　アカリの困惑に、小気味よく頷く。

「アカリを殺すのか、殺さないのか。自分が生きたいのか、死にたいのか。ぜんぜん答えが出てないの。 との勝負でね、全部が全部、砕けてなくなったのよ。私がどうするか、歩くべき道が、私自身の中からなくなったの。……アカリはどう思う？」

「わ、わたしの結論は変わらないから！　メノウちゃんが危なくなるくらいなら、わたしはメノウちゃんに殺してもらったほうがいい！　そうじゃなくとも、メノウちゃんに生きてほしい」

　アカリの主張は、最初から変わらないものだった。

「メノウちゃんが決められないって言うなら、わたしが決める！　すぐに、逃げてよ。モモちゃんを連れてさ、生きるために逃げてよ……」

「うーん」

　少し思案の合間を入れたメノウが、どきりとするほどまっすぐにアカリを見つめる。

「勘違いしないで欲しいんだけどね、アカリ。あんたがやっていることって、行き詰まってるわよ？　結果だけ見てほしいんだけど……アカリが勝手に時間を巻き戻して、一人でループを何度も繰り返して、それで改善されたことはあるの？」

　アカリの顔面が蒼白になる。

　言われずとも、わかっていたことだ。 『 』にはなぜかループ時の記憶がある。霧の結界が軋んで『 』の小指が逃げ出した。アカリは自分の記憶を失い続け、自分が誰なのかという確信すら揺らいでいる。

　振り出しに戻しても、事態は好転していない。繰り返せば繰り返すほど、悪くなるばかりだ。

「自分で自分をごまかし続けるつもり？　そうだったからっていう結果ばっかり見て、周りを見ないで」

　ちょっと前までのメノウみたいに、突っ走って。

「そんな自己満足で、私を救うのは無理よ」

　メノウに諭されたアカリの目に怒りが宿る。

「じゃあ、どうすればいいの!? 」

　精神のタガが外れ、魂から生成された導力が全身からあふれでる。感情のままにむき出しになった【力】は、遠く吹き荒れる『竜』に劣らぬほどの深さがある。

「わたし、バカだからわかんないよ！　だからわたしは、わたしがしたいようにしてるの！　わたしが死んで、メノウちゃんが生きるならそれでいいって、わたしはメノウちゃんを殺してまで生きたくなんてないもん！」

　アカリが叫んだ。子供が駄々をこねるように、自分の欲求を声に出す。

　メノウは、それをすべて真正面から受け止める。

「メノウちゃんと一緒に生きていけたら、それでいいに決まってるじゃん！　それ以上なんて、あるわけがない幸せだよっ。でも、できないんだよぉ！　メノウちゃんが、どうやっても死んじゃうっ。わたしが生きていたらダメだって、なんでわかってくれないの!? 」

　メノウの死は、アカリにこびりつくトラウマだ。

　自分のせいで、大切な人が死ぬ。それがどれだけ彼女の心を傷つけ続けたのか。

「お願いだから、わかってよ！」

　アカリの感情の嵐を、メノウは残らず受け取った。

　受け止めて、やっぱり自分がアカリにこだわっていることを自覚する。モモほど長い付き合いではない。 ほどに特別な関係でもない。それでもメノウはアカリに惹かれるなにかを感じていた。

　だからメノウが手を差し出す。

「わかってよって言うのなら、わからせてみなさいよ」

　聖地を消し去ってまで邪魔者を追い払って、二人きりになった甲斐があった。

　メノウには言葉で聞くよりも踏み込んでアカリのことを理解する方法がある。

「アカリ。いまからあなたと、導力接続をするわ」

「え？」

　なぜ突然という困惑を無視して、メノウはアカリの手を取る。

「最初に言ったでしょう？　私は、自分の答えを見つけに来たのよ」

　導力の相互接続。主にメノウがアカリの膨大な導力を引き出して魔導の威力を増強させるため、幾度となく行ってきた。だが本質的には導力の相互接続は、肉体と精神を通して魂に触れる行為である。

　そこには人間を構成する感情、記憶、人格がダイレクトに存在する。

「アカリが繰り返した時間で、なにを見て、なにを感じて、なにを思ったのか。それを全部、導力接続を通して、私に感じさせてみなさい。私は、その時のアカリになる。あなたの感情を全部、受け取る。その時にいまのアカリと私が出す道の答えが一致すれば、言われた通りに逃げるわ」

「……わかった」

　アカリの目が据わる。

　繰り返して来た自分の経験。時間の積み重ねがどれだけの絶望だったのか知れば、メノウも諦める。自分を助けるという行為が、どれだけの徒労なのかが理解できるはずだという確信があった。

「じゃあ、行くわよ」

「うん」

　つないだ手から、メノウは導力を流した。

『導力：接続──』

　慎重に、細やかに、二人の人間が一人になるような滑らかさで。本来ならばあるべき抵抗は、ほとんどない。魂と精神をゆだねるアカリの信頼は、この段になっても揺るがない。

　メノウがアカリの魂に深く踏み込んだのは、一度だけ。大司教オーウェルとの戦いで決着の一撃となった魔導を放った時のみだ。そのほかは、あくまで精神の表面をなぞるようにして、【力】の上澄みを い取っていた。

　今回は、かつてないほどに深くアカリの魂に踏み込む覚悟はできていた。

『トキトウ・アカリ──肉体・精神・魂──』

　魂から生成される導力を利用するためではない。導力からつながる魂へと触れるためにメノウは、アカリの中に踏み入った。

　アカリの魂には、かつてと変わらずぞっとするほど膨大な【力】があった。本来ならば人の身に宿るはずのない、星の概念としてあるべき、なにか。無限の宇宙に等しい【力】は、かつての自分が恐れた場所だ。

　メノウは落ち着いた精神のまま、歩み寄る。精神だけではない。自分の魂をアカリの肉体に移し替えるほどの導力接続で、アカリの中に入り込む。

　この時、不思議なことに【時】の純粋概念はメノウを受け入れた。

　本質に触れる。支配するでも浸食するでもなく、ただ、そこにある。悪意も善意もない。海が波で荒れるように、黒雲に雷雨がほとばしるように、人間の事情など斟酌せずに理に従って存在するのが純粋概念だった。

【時】を踏破したメノウは、アカリ本来の魂にたどり着いた。小さく丸まっている彼女に、メノウはそっと手を触れる。アカリのいまが伝わってくる。

　アカリの優しい心があった。アカリの感じた恐怖があった。どれほど心細かったのか、叫びだしたいほどの情動が混在していた。

　メノウは微笑しながら、さらに奥へと触れる。いまから過去の記憶へ、知識としての記憶からその時の感情に、いまのアカリをつくったすべてを受け取る。

　メノウはアカリが繰り返した時間の旅を、追体験していく。

　はじめてメノウに出会った時の戸惑いと警戒心、一緒に旅をして徐々にほぐされていく心、笑顔が多くなり、別れが惜しくなり──そしてメノウが に殺された慟哭と、知らされた真実に付随する混乱、時間を繰り返してメノウと再び出会った喜び、警戒されて理解されない悲しみと孤独、一人で運命を変えるという決意。

　繰り返された時間軸の中でアカリの感情がメノウの魂を埋めていく。

　自分の魂を合わせるかのように導力を注ぐ。人格が溶け合うような導力接続。

　メノウは自分という意識を失くして、アカリの視点で、自分を見る。

　アカリが見る自分はいつも頼もしくて、間違った行動なんてしなくて、迷わず決断するメノウだった。いつも果敢に危機に飛び込んで、アカリの窮地にいつだって助けに来てくれるメノウがいた。まさしくアカリのヒーローのメノウがいた。

　そんなメノウですら、 『 』には敵わない。

　メノウが死ぬ。何度も殺される。再会の喜びからの死別の悲しみ。孤独と絶望の繰り返し。言葉にならない感情の落差のループ。メノウはどうしようもなく、アカリの心を理解した。メノウに生きてほしいという切望に共感した。

　どうしようもない。

　アカリが繰り返してきた旅路は、どうしようもなく行き詰まった時間の檻だった。

　メノウの精神が、アカリから分離する。完全に同調した心は、異世界に来てからのアカリの気持ちを十全に理解していた。

　アカリは、メノウの道に答えを出していた。

　生きてほしい。

　友達で、親友で、誰よりも大切なメノウに、生きてほしい。

　泣きたくなるほど切ない願い。純粋に祈る、儚い願い。自己犠牲をもって完遂しようとする、きらめく意思。アカリが願うメノウの生きる道が提示された。

　これが、自分の答えなのか。

　開けた道は正しく見えた。どうしようもなく 『 』に勝てない。だから、メノウが生きるために逃げる。どうせ、 に一度負けて処刑人としての信念は砕け散っている。 の追っ手を振り切りながら逃げ続ける一生がふさわしいのかもしれない。

　それも、いいのかもしれないと思ってアカリと手を離そうと指を動かして。

　──でも、そこにはアカリがいない。

　メノウは、踏みとどまった。

　まだだ。まだ答えを得るのに、足りない。アカリの答えだけでは、メノウは足りていない。

　だってメノウは、アカリが見たメノウほどに強くなんて、ないのだ。

　メノウはアカリの両手を祈りの形で包み込む。突然の動きにアカリが戸惑った。メノウは構わずに彼女に顔を寄せて、

「メノウちゃ──いだぁ!? 」

　頭突きの勢いで自分の額をアカリの額へとぶつけた。

　困惑の声が悲鳴に変わる。メノウは再度、導力接続。アカリの魂に触れる。

　さっきはメノウがアカリの人生を受け取った。

　だから今度は、自分の人生をアカリの魂に注ぎ込んだ。

　額と額の接触部分から、導力をつなげて流す。自分がアカリを理解するだけでは足りなかった。自分がアカリの感情を受け取ったのだ。アカリにだって、メノウを理解してもらう。メノウがアカリの回帰した時間を見て答えを出しかけたように、アカリだってメノウの記憶を受け取れば違う答えを出すはずだ。

　だからメノウも、いまの自分をアカリへとさらけ出す。アカリも知らない自分の人生。 に拾われてから続いた旅路。処刑人になるための修道院での訓練。モモとの出会い。処刑人になって、人を殺し続けた日々。まさしくメノウという人格の成り立ちを赤裸々に伝える。

　そしてアカリと出会ってからの、最後の三ヶ月間の旅。

　短くも穏やかで、きっと、メノウが一番多くの笑顔を浮かべた時間。

　メノウとアカリ、二人の過ごした旅路が違う視点で展開されて、一つに再編成される。違うはずの人生が混じり合う。互いにまったく別々に歩いていた道が、一本になる。

　アカリの中にも、メノウはいる。

　メノウの中にも、アカリがいた。

　二人が、互いの心を理解した。人を殺し続けたメノウの自罰的な心を、アカリの感情が溶かしていく。繰り返し続けたアカリの絶望に、メノウの理屈が答えを出す。

　道は一つだとしても、一人で歩く必要なんてない。

　隣に、誰かがいる。孤独に歩くことはない。孤立するよりも先に、まず、隣に声をかければいい。そうして初めて、二人の答えは一致した。



　メノウが、目を開ける。額を突き合わせた姿勢は、思った以上にアカリの顔と近かった。

　つながっている。

　導力接続が終わったはずなのに、お互いの魂に道ができている。細く、目には映らず、けれども確かに魂同士でつながる導力経路。感情が共鳴する。二人の人間に分かれているのが不思議なほどの一体感があった。

　きっとこれは一時的なものだろう。それでもメノウは、かつてないほどにアカリのことを理解していた。同じように、アカリもメノウのことを理解している。いまの二人は、互いの人生を受け取って経験していた。

「まだ迷ってるの？」

「だって……」

「たった一度の人生でしょ。迷ってばっかりじゃ、後悔するわよ」

　何度も繰り返して来たアカリの時間を見て知って、それでもメノウは言う。

「私は、生きるわ」

　アカリが生きてほしいと願っている。自分は人を殺してきた。だから許されてはいけないという理屈を超えて、生きてほしいと願うアカリの感情がメノウを生かす。

「だからアカリ。あなたの答えだって一緒よ」

　アカリがふくれっ面になる。自分が死ねばメノウを生かせるという感情が、メノウの理屈によって別の答えを得る。

「メノウちゃんは、ずるい……」

「ずるいわよ。悪い奴だもん、私は」

　すまし顔で返答する。

　いまここで答え合わせは一致した。だから、まずはやらねばならないことがある。

「あんたを殺せる方法を、ぶっ壊しに行かないとね」

『塩の剣』。

　大陸を一つ、丸ごと塩と変えた必滅の剣。誰でも使える不死殺し。

　それさえなくなれば、不死のアカリを殺せる手段はなくなるのだ。

　やるべきことは多いが、まずは、そこだ。二人は同時に同じ場所へ視線を向ける。

　いま二人が立つホーム、線路の先にある光の扉『龍門』。

　そこにはフーズヤードが準備した塩の大地に続く導力路が用意されている。聖地とは関係なく独立した転移魔導陣は、しっかりと残っていた。

「行くわよ、アカリ」

「うん、メノウちゃん」

　同じ思いを抱える二人が線路を歩き、遥か彼方への道を通り抜けた。

　天空に投げ出されたのかと思った。

『龍門』を抜けた先。広がる光景に、メノウの平衡感覚がふらりと崩れた。

　転送された場所は、空だった。

　立つべき大地が見えないという錯覚に思わず もちをつきそうになって、自分が重力のもと二本足で大地を踏みしめている事実に我を取り戻す。

　空の風景しか目に映らずとも、いまメノウたちがいるのは空ではない。

　二人が立つ場所は、美しい鏡面の世界だった。

　メノウが前に見た、白い白い世界とは違う。かつての と訪れた時は、曇天だった空模様も含めて、無辺に白い塩の広がる世界はただひたすらに白くなっていた。

　だが、いまは違う。

　きっと、雨が降ったのだろう。

　限りなく平面に近い塩の大地に、薄く、広く、水が えられていた。波が起こらないほど浅く塩の大地を覆った水面は、光を反射する天然の大きな大きな鏡となって広がっていた。

　見渡す限り、地面に空が映っている。

　地平線の境界がなくなり、天地の世界がつながっていた。青い空に、たなびく雲。空の動きに大地が応える。夕日になれば赤くなり、夜になれば星々が天地に飾られるのだろう。

「……きれい」

　素直に、子供みたいな感想が出た。

　言ってから、アカリみたいな感想だと口元がほころぶ。当の本人はどうだ、と見てみれば、言葉もない様子だった。

「す」

「す？」

「すっごい！」

　大歓声だった。

　足元の水をバシャバシャさせながら駆けだす。それこそ本当に子供のように大はしゃぎで両手を広げて振り返る。

「見てみて、メノウちゃん！　ほんっとうに、すっごいきれい！」

　アカリの喜びが、導力接続により二人の間でつながった魂の経路を通じてメノウへとダイレクトに伝わってくる。

　微笑みながら、メノウは改めて視界を巡らす。

　空も海もない世界は、絶景にふさわしい。この景色を守るために が管理しているのだといえば、ほとんどすべての人は納得するだろう。 な世界は、多くの労力を いでも守るだけの価値があると思わせるものだった。

　一歩、足を進める。

　鏡面に、波紋が広がる。メノウの歩みに呼応して水面が波立つ。前に進むメノウより、少し先へとさざ波が広がる。

　かつての大陸だった、塩の大地。水を湛えた天空の鏡の世界は、これから死闘が繰り広げられる場所と思えないほど、ただただ美しい。

　いつまでも遊んでいるわけにはいかない。

「ほら、こっち」

　アカリの袖をつかんで、移動を促す。

　幼少の記憶を頼りに進んでいけば、懐かしい場所にたどり着いた。

　そこにあったのは記憶通り、みすぼらしい剣だ。

　つつけば崩れ落ちそうで、錆びた剣よりも頼りなく、実用性が皆無に見える。

『塩の剣』。

　四大災害を討滅、封印せしめた【白】が生み出した清浄の権化。刃で切ったものを際限なく浸食して塩に変え続け、大陸を一つ、海に溶かしてしまった最悪の魔導兵器。

　星だって滅ぼせる剣が視界に入る場所まで来た。

　アカリが意を決して、足を踏み出そうとした。

「待って、アカリ」

　メノウの制止に戸惑ったアカリの心が、導力路を通じて胸に伝わる。つながる経路を通して無言のまま理屈を流せばアカリは納得した。

　ここから先はメノウが一人で行くべきだ。

「わかった、待ってる」

　アカリの答えに微笑んで、メノウは自分一人だけ先に進む。

　立ち止まったアカリから離れて、あと数歩で『塩の剣』に手が届く距離。メノウはつま先で水を跳ね上げる。足元を浸す程度の浅い水たまりだが、水量は必要ない。飛ばされた水滴が、なにも見えない空間にぶつかった。

　ゆらり、と正面の景色に波紋が発生する。水をかけられた部分からペイントがはがれるようにして、女性が現れた。

　 『 』。

　姿を背景に溶かしていた待ち伏せていた の導力迷彩を、メノウは見抜いていた。

「一人で来たんですか？」

「ああ。あのまま大聖堂にいれば、エルカミの命令で『竜害』の対処をさせられかねなかったからな。先に来て、待ち構えさせてもらった」

　すんなり返答した は、前にいるメノウと後方で を飲んでいるアカリを見て大きく口を開けて笑う。

「お前らは、二人か」

「はい」

　メノウは落ち着いて言葉を返す。

「『塩の剣』を壊しに来たのだろうが……できるのか？　人を殺すことをためらうような、ひよっこが」

「できます。アカリとの記憶を取り戻したんです」

　メノウが経験していない回帰した時間軸での記憶。いまだアカリとつながる魂の交歓。

　それを無駄なものにさせない。アカリにだって、この時間軸を失わせない。

「なるほど、導力接続か。それも、答えの一つだ」

　 が心底、おかしそうに笑った。他者との導力接続。メノウがようやく、その真価の一端に触れたことを見抜いていた。

　メノウもアカリの回帰中の記憶を受け取ることでわかったことがあった。

「 はアカリを殺すつもりがないですよね」

「よくわかったな」

　考えればわかる。

　どの時間軸にあっても、 はむしろアカリを殺さないように注意深く行動している。メノウがアカリを殺そうとすれば、メノウのことを殺すほどの徹底ぶりだ。

　 にとって、アカリを暴走させることこそが重要なのだ。魔導の蒐集のため──だけなのか。 の真意まではわからない。

「お前の言う通りだ。トキトウ・アカリを殺すつもりはない。今回に限っては 化させればお終いだ」

「…… 化させた後は、どうするつもりなんですか」

「どうするつもりもない。後のことは、私の仕事ではないからな」

　言い切った が、不意に腕を振るう。

　横に一薙ぎ。振り抜かれた腕は、塩の大地に突き刺さっていた『塩の剣』に当たる。

　この世でもっともおぞましく清らかな剣が、ばらばらに破損する。脆い外観を裏切ることなく千年の年月そこにあった『塩の剣』は、あまりにもあっさりと砕け散った。

　メノウは絶句した。 はメノウの反応などに構わず、散らばった破片を丹念に踏みつぶす。

　かつて大陸一つを滅ぼした剣が、形を崩す。取り返しのつきようもなく、ただの塩となる。

「お前に壊すことは、できなかったな」

　 が『塩の剣』を壊したのに、深い理由はない。

　メノウが壊しに来たと言ったから、彼女は先んじて自分の手で壊した。いまの にとっては無用の長物であり、メノウを否定して意気をくじくことに使えそうだから壊したのだ。もはや嫌がらせの域でしかない精神攻撃は、壊したものが唯一無二の『塩の剣』だというだけでメノウから言葉を奪うだけの威力があった。

「それで、メノウ。次にお前はなにをする？」

　不死のアカリの殺害手段『塩の剣』を壊せば、それでいいのか。 から背を向けて一目散に逃げればお終いなのか。メノウがまだ言葉にしていない真意を、『塩の剣』を破壊することで引き出そうとする。

　一度、 を殺すことを避けたメノウに問いかける。それがどれだけ貴重だろうと、それにどれだけの【力】が込められていようと、そこにどんな伝説が語られていようと── 『 』にとって、道具は道具でしかない。

　メノウは大きく息を吐く。『塩の剣』を壊す。ここに来る前に吐いた言葉は、 によって打ち砕かれた。ああ、まったくやってくれたなと りたい。自分の心も言葉も誤魔化せない舞台に引きずり出された。

　だからメノウは、言ってやるのだ。

「 がアカリを 化させようとするのを、全力で止めます」

「どうやって？」

「あなたを、殺して」

　メノウの返答に、迷いはなかった。後ろにいるアカリを守るため、自分がこれから歩こうとする道のため戦う意思は揺らがない。

「くはっ」

　自分の意思で殺す相手を選べるようになったメノウを見て、大きく口を開いて笑った。

「それは、楽しみだ」

　 が、後ろに手を回した。

　教会のシンボルマークを留め金にして、神官服の胸元を留めているベルトの余り。そこに るして納めている短剣をゆっくりと引き抜く。

　抜剣の動きは だらけだったが、飛びかかる気になれなかった。

　わざとらしすぎて かと疑ってしまう。深読みのしすぎかと飛び込めば、致命傷を負う確信がある。浅薄も深慮も足かせになることを知っている者の動きだった。

　メノウの中に形成されている人物像すらも利用するのが一流の処刑人、 『 』だ。

　彼女は短剣の刃を下に向けて、手を離す。

　自由落下をした短剣の切っ先は、塩でできた い地面にあっさりと突き刺さる。 は続けざま柄を踏みつけにし、刃の根元まで食い込ませた。

　短剣を踏みつけにした足裏から導力を流しこむ。

　 の短剣に刻まれた紋章は二つ。【導枝】と【迅雷】だ。発動したのは、前者だった。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導枝】』

　小刻みな振動に水面が乱され、天空の鏡が歪む。目に映る地中の異常に、メノウは意識を下方へと向ける。

　ぼこり、と地面が盛り上がる。

　水面をかき分け大地を構成する塩をまき上げながら導力の枝が伸び上がる。地面に突き刺さった短剣から根を生やす導力の枝は、 の操作によって瞬く間に一抱えはある樹木へと成長していく。

　一本ではない。メノウの周囲で、導力の樹木が数え切れないほど芽吹き始める。

　さほどの時間もかけずに出来上がったのは、導力で造り上げた光り輝く樹林だ。

　一本一本が の意のままに動く樹木がメノウを取り囲む。

「これで死ぬなよ」

　どこからともなく響いた の声を合図に、全周囲から鋭くとがった枝が襲い掛かってきた。

　身を したメノウの髪を導力の枝がかすめる。髪の毛数本の犠牲で初撃をしのぐ。休ませることなく、時間差で枝がしなって足払いを仕掛けてくる。

　メノウの動きのすべてを、戦場から離れた場所にいるアカリは感じ取っていた。

　導力樹林におおわれた内部を、アカリの位置から見通すことはできない。だが魂同士の導力接続の影響で、メノウの感情が五感とともにアカリへと伝わっていた。

　メノウの肉体の鮮烈な動き、危険に襲われてもひるむことない精神の冷静さと魂から湧き上がる闘志。メノウが見て聞いて嗅いで感じているものがアカリにも共有される。

　メノウは顔面を狙ってきた枝を短剣で き、紋章魔導を発動させる。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【導糸】』

　短剣の柄から導力の糸が がれる。これ単体で、なにかの攻撃を防げる魔導ではない。そういう意味では神官服に刻んだ【障壁】のほうが状況に適切だろう。

　だが【導糸】の使い道は工夫次第でいくらでもある。メノウは攻撃を避けざまに、うごめく導力の木々に導糸を ませる。

　メノウの持つ短剣紋章の一つ【導糸】は、細くとも だ。動かせば動かすほどに、枝に絡んだ糸が複雑にまとわりついて動きを阻害する。

　ぎしり、ときしむ音がした。

　導力の木々の動きがもつれあって停止し、あるいは張り巡らされた糸に弾かれて妨害される。

　まずは がつくった森林地帯からの脱出が先決だ。導糸を張り巡らせたメノウは、ぴんっと張った糸を足場に飛び乗った。地面にはないしなりを味方につけて大きく跳ねる。張り巡らせた【導糸】を足場にトランポリンでも使うかのように、飛び跳ねる躍動感。自分ではできない動きが、アカリの心を躍らせる。

　違うはずの人間とすべてを共有する感覚は、いままでにない不思議な体験だ。アカリではできない駆動に、考え。知らなかった世界を見せてくれるメノウの思考と動きに、アカリは不思議な心地よさと興奮を感じる。

『導力：接続（経由・導枝）──短剣・紋章──発動【迅雷】』

　瞬く間もない魔導構築。メノウの横にあった導枝が、ほとばしる雷撃に変わった。絡めた導糸を焼いてメノウを狙い ちにする。

　アカリがはっと息を呑む。危ないっ、と小さく声が漏れる。

　だがメノウにとっては予想の内だった。

　アカリと違って が即座に対応することに疑いを持っていなかったメノウは、寸前で別の導糸に手をかけて空中で方向を転換。頭上を打ち抜く雷撃の熱を感じながら、もう一跳ねする。

　 の魔導構築速度はメノウと同等以上。普段の相手のように見てから後追いで防ぐ余裕はない。魔導構築の気配から【迅雷】の発動を感じ取り、糸を足場にした不規則な立体機動でかわし、前に進む。

　すごい、とアカリは目を輝かせる。メノウがすごいことは知っていたつもりだった。だがメノウの視点に立つことで、より顕著にメノウのすごさを感じ取れる。彼女の判断力の果敢さ、導力操作技術の繊細さ。アカリにはないものが備わっている。

　距離にして、五十メートルもない がつくった森林地帯。時として雷撃に変わる樹林の間を、張り巡らせた導糸を使って抜ける。頰を撫でる風、重力を振り切って跳ねまわる生動がメノウの感覚をトレースしているアカリの心を浮き立たせる。

　雷に焼かれることなく森を抜けた。メノウの視界が一気に開ける。広がるのは、空一色の光景だ。障害物はないというのに、 『 』の姿はどこにもない。

　メノウは迷わずに、一点に向けて する。

　なんで目に見えない相手の居場所が、というアカリの疑問はメノウから伝わる理屈で解消される。アカリがメノウの視界を共有していたように、メノウもアカリの視界を共有していた。 とメノウが戦う場所より、離れたところにいるアカリの視野は広くなっている。

　戦場を俯瞰するための、第三者の視点だ。

　これを活用しない手はない。メノウが の居場所を探るために注視していたのは、アカリがまったく注意を払っていなかった水面だ。

　戦闘で発生した波紋が、不自然に跳ね返っている場所があった。目に見えずとも実体がある証拠だ。居場所が気取られたことを悟ったのか、導力迷彩が解かれて赤黒い髪の神官が現れる。

　いままで恐怖しか感じなかった相手。トラウマの象徴。

　 『 』を目にしながらも、アカリの心に恐怖はなかった。むしろ酔っているかのような興奮状態にあった。アカリが純粋概念を使う戦いとはまったく別の生身の戦闘。メノウの感覚をトレースすることで、まるで別人になったかのように、戦闘への爽快感がアカリのテンションを押し上げる。

　メノウが水面を蹴る。 に向かって、まっすぐに。短剣の紋章【疾風】を発動させて、さらに加速する。

　心が猛る。短剣を握る指の感覚、疾走するスピード感。メノウと一体になったアカリは、自分が戦っているかのような興奮のまま、メノウが短剣を突き出す瞬間に叫んでいた。

「負けるなぁッ、メノウちゃん！」

　──負けて、たまるかぁ！

　聞こえないはずの距離にいるアカリの声を受け取って、メノウの戦意が る。

　叫ぶアカリの興奮に押されるがままに、自分の心も開放する。冷静さなんてかなぐり捨てて、闘志をむき出しにする。処刑人らしさなんて微塵もなく、真正面から気迫をぶつける。

　金属音を立てて、刃がかみ合った。

　つばぜり合いは一瞬だ。刃鳴りが収まる間もなく、二合、三合と。斬り合う二人を包む導力強化の燐光が、ぱっ、ぱぱっと天空の世界を彩る。

　足元に水しぶきを散らしての、短剣闘術の応酬。一瞬の隙を突いたのはメノウだ。体ごとぶつかる刺突。心臓を狙った一撃が突き刺さる。

　やったというアカリの思念とは裏腹に、メノウの手に人間ではない硬質な手ごたえが伝わる。人を刺した手ごたえとは決定的に異なる固さ。 は事前に発動した【導枝】を盾にし、導力迷彩で隠していた。

　続けざまに、もう一つの紋章魔導が発動された。

『導力：接続──短剣・紋章──発動【迅雷】』

『導力：接続──神官服・紋章──発動【障壁】』

　発動した【迅雷】と【障壁】とが相殺しあう。

　同時にメノウは大きく飛びすさる。目の前の とはまた別に、アカリの視界に気になるものが映っていた。

　気がつけば背後にあった導力樹林の一部同士が枝を伸ばし絡まり合っている。

　あれがまとまって襲い掛かってくるのか。そうと見せかけて、地中から来るのか。あるいはただの誘導で、 が背後から短剣を突き立ててくるのか。

　いや、どれもが違う。

　目の前で形成される無意味なほど秀麗な樹木のゆりかごを見て気がつく。

　あれは、儀式魔導式だ。

『導力：接続──導力枝・儀式紋章魔導──発動【月桂の冠】』

　月桂樹の が花開く。

　いくつも咲き誇る華やかな花の中心から、光線が放たれた。

『導力：接続──教典・二章五節──発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

　防御に神官服の紋章ではなく、教典魔導を選んだのは正解だった。素朴ながら秀麗な導力の花が次々と咲き誇る。一輪が咲くごとに、時間差で正確にメノウの急所を狙って光線が放たれていた。

　メノウでも知らない魔導だ。恐るべきことに── の、オリジナルだろう。放たれる光熱は一発一発が致死性の威力を持ちながら、魔導効果の継続時間が長い。独創とは思えないほどに優秀な魔導だ。

　なんという底知れない導力技術だろうか。駅舎で戦った時。やはり はまったく本気ではなかったのだ。

　それが、なぜか嬉しい。

　メノウは浮き立つ心を抑えることなく、短剣を構える。感情的なアカリとつながっているせいか、戦闘中だというのに常にない興奮がある。

「まずは、っとぉ！」

『導力：接続──短剣・紋章──二重発動：【導糸・疾風】』

　紋章発動と同時に短剣を する。疾風で加速した刃が、導力樹林の一部に突き刺さる。

　経路はつながった。遠く、戦闘を見守っているアカリへと導力を接続する。

『導力：接続──トキトウ・アカリ──抽出【力】──』

　触れることもせず、つながった経路からアカリの導力がメノウへと補てんされる。

　導力を引っ張られるのは肌を撫でられるような感覚がある。アカリと感覚を共有しているせいで、メノウにまでくすぐったさが伝わったのは予想外だった。

「ん、ぅっ」

　ぴくりと肩を震わせながらも、アカリから引き出した導力は魔導構築には使わない。本来のメノウでは逆立ちしても生成できない莫大な【力】を、導糸でつながった導枝へと流し込む。

『流入【導枝】』

　流し込まれた膨大な導力に耐え切れず、次々と破裂する。スマートさの もない力づくの対処だ。

　導力の操作には経路が必要だ。メノウが【導糸】を発動させれば必ず柄から導力の糸が伸びるように、 の【導枝】も根は短剣にたどり着く。

　地面から生えていたすべてが掃討された。

　導力樹林の残骸が散らばる中で一人、 は佇んでいた。

「悪くない」

　メノウの殺意に、 が んだ。知らず、メノウも笑んでいる。まだ戦えることが、なぜか嬉しい。

「だがな、メノウ。自分が生きると決めて、挙句に『迷い人』を生かそうとする。お前は、それでいいのか？」

　前回の戦闘同様、メノウの心を揺さぶるために核心を突いてくる。

　メノウは処刑人として生きてきた。

　殺してきた人々に対して、罪悪感はないのかと問うている。

「罪悪感はありますし、自分が間違っているとも思います」

　メノウは即答した。

　アカリを助けるのならば、もっと早く を裏切ればよかったのだ。いまさら人助けなど、どの面下げてと理性が呟く。殺してきた彼ら彼女らに顔向けできない。ともすれば、自分の喉に短剣を突き刺して死にたくなるような罪悪感がメノウを襲う。

　いつか死にたいという心が、メノウの中にずっと存在した。

　けれどもメノウの自罰感情を超えて、アカリから生きてほしいという願いが流れ込んでくる。魂のつながりから伝わるアカリの気持ちが、立ち止まろうとするメノウの背を押す。

　だから、言える。

「それでも、私に生きろというやつがいるんです」

「ふん……トキトウ・アカリの 化はどうするつもりだ？」

「私がアカリと一緒にいることで、純粋概念を使わせません。なんなら、私が導力接続でアカリの記憶を補完します」

　メノウはアカリの魂と導力接続することによって、彼女の記憶を保持している。過去に失った記憶は取り戻せないが、これからアカリが純粋概念を使って失いかねない記憶はメノウの中にあるのだ。

「お前を信頼しきっている【時】に限れば、 化はないということか。なら、これからも来訪し続ける他の異世界人どもはどうする？　その全員と友好を深めて、異世界さながら、仲よしクラスでもつくれば問題は解決かもな。はっ！　……夢物語もいいところだぞ」

　言われるまでもない。メノウ個人ではアカリ一人の 化を防ぐので精いっぱいだ。

　だがこれからも来る彼らへの対応だって、まったく考えていないわけではない。

「 も言ったじゃないですか。『お前は、生きる道を間違えている』って」

「いまさら、やり直せるとでも？」

「……私は昔、自分には世界を変える力がないから、誰かの代わりに泥をかぶろうと決めました」

　それは幼い日の誓いだ。 の統括する修道院に引き取られて、人殺しの訓練を受ける少女たちが少しずつおかしくなっていくのを見てメノウは誰かの代わりに人を殺そうと決めた。

　そうすれば誰かが善い人を殺す機会が、ほんの少し減るから、と。

　メノウにだって処刑人としての使命感はある。禁忌を処理することで の人々を守っていたことも事実だ。誰かのために誰かを殺すことは、決して、間違いばかりではない。

　けれども、ただ び出されただけの異世界人に対しては、違う方法だってあったのだ。

　だからメノウは、やり方を変えることを決意した。きっとこれからも誰かを殺す。誰かのために誰かを殺す処刑人であることには変わりない。ただ の定めたルールに従う処刑人ではなくなる。

　メノウの目指す道は、一つ。

　異世界人を殺すわけでもなく、多くの犠牲を出して彼らをもとの世界に送還するわけでもない。

「異世界人召喚という概念を殺してみせます」

　異世界人を、そもそもこの世界に召喚させないことで、純粋概念という禁忌自体を世界から殺す。人為的な召喚だけではない。自然発生する異世界人の召喚も、原理を突き止めなくしてみせる。新たな魔導を蒐集している【 】ならば、自然召喚の理まで知っている可能性だってある。

　誰かのために泥をかぶるのならば、これからのメノウは『善い人』である異世界人のために、この世界の誰かを殺して仕組みを変える処刑人となる。

「だから、 。私はこれから──世界を変えるような力を持って、アカリと一緒に『迷い人』を助けます」

「……は」

　 が、絶句した。目を丸くして迷いのないメノウの表情を、まじまじと見つめる。

　次いで、肩を震わせ哄笑した。

「く、くくく、くはっ、はははははは！　世界を変えるような力だと？　お前が、そこの【時】と一緒に？　『迷い人』と助ける？　くはははははは！　──お前は、ほんとうのほんとうにバカなんだな」

　言葉通りに、信じられないバカを見る目だった。くつくつと笑みを残したままの にメノウは問いかける。

「そういう は、どうして人を殺しているんですか」

「私か？」

　勝ったら、二度と問いかけはできない。

　負ければ、 はメノウを殺すだろう。助けようとしたアカリも として暴走し、助けてくれたモモも殺される。だからメノウは、今度こそ後悔のないように、自分がこれから殺す相手の心に触れる問いを投げる。

「簡単さ。誰かに、人を殺せと言われたからだ」

　 が明かしたのはあまりによくある答えだった。

　命令されたから殺した。処刑人となった神官の誰もがそうであるという返答だ。

「意外なことにな、私は、自分の意思で人を殺したことは一度もないんだ」

　誰かを恨んで殺したわけでも、正義感に駆られて刃を振るったわけでもない。決まりごとに従い人を殺す彼女は、一種、社会機構の歯車だった。

「教えられるがまま人を殺した。誰かに命令されるがまま人を殺した。定められた規則に従うがまま人を殺した。高尚さもなく、目的もなく、意味もなく、恨まれようとも憎まれようとも構わずに、報いも称賛もなく殺した。友人を殺した時すら、そうだ。私はあいつが禁忌だから殺した。私はただそれだけだった」

　彼女はどこまでも処刑人らしく任務に準じ続けた。

　自分の確固たる意志で処刑人としてあるわけではなく、処刑人として振る舞うがままに人を殺していた。

　誰かを殺す度に処刑人として完成して、処刑人として人殺しの果てにたどり着いて行き詰まったのが、 『 』だった。

「罪悪感もない。絶望もしていない。人を殺そうとも、私はなに一つ変わらない。私は初めて人を殺してからずっと、私のままだ。わかるか、メノウ。私という存在がのうのうと生き延びていることこそが、この世界に天罰などないことの証明だ」

　ああ、と理解が及んだ。

　かつての教えがよみがえる。救いなく、正しさもなく、報われることもなく、称賛されることもなく、惜しまれることなく、憎まれ恨まれ禁忌を殺してきた伝説の処刑人『 』は──使い捨てられることだけは、なかった。

　メノウに教えながらも、『 』が実践していなかった言葉。

　そこに の願望があった。

「私は、そんな悪人だ」

　 は、自分が悪人であることを知っている。だから は、メノウを育てたのだ。

　彼女が求めているのは、罰だ。死にたいわけではない。自分が全力で抗って、最善を尽くして、それでもどうしようもなく逃れようがない罰がくだるのを待っている。

　処刑人として使い捨てられることのなかった 『 』は、鏡映しになった己自身のような人間に殺されたかったのだ。

　彼女の求める心を知って、メノウのためらいが溶ける。

「 。もう二度と『迷い人』をこの世界に来させないためには、どれほどの犠牲が必要ですか」

「『主』に背いて【 】を殺せ」

　悩むことなき即答だ。きっと は、とっくの昔に世界を変える手段の答えを得ていて、けれどもずっと、実行できなかった。

　だって、彼女は処刑人なのだ。

　世界を救う機能は、彼女の魂にも、精神にも、肉体にも備わっていなかった。

「そうすれば、おのずと世界は変わる。私は、【 】の一人すら殺せなかったがな」

　ならば、メノウがその道の先を行く。その決意が言わずとも伝わったのだろう。

「メノウ。お前は、一丁前の処刑人だった」

「はい」

「それが、トキトウ・アカリとの時間を得て幸福によりすべてが壊れて組み変わった」

「はい」

「だから、覚悟しろ」

　 が左手に持つ教典が導力光を帯びる。いままで使ってこなかった武器。ここから、本当の真価が発揮される。

「いまこの時、私を殺さねば、お前は死ぬ」

　メノウは無言のまま短剣を握った右手をまっすぐと突き出す。

『導力：接続──紋章・短剣──発動【導糸】』

　紋章起動により生成された導力の糸が、ひゅるりと吹いた風に舞い上がって螺旋を描く。

　踏み越えるべき道で二の足を踏む真似は、もう二度とするつもりはない。

「行きます」

「来い」

　かつての幼い日、 になると決めた約束の地で。

『あなたになりたい』という幼い言葉を覆すための戦いが、始まった。

